

大防風湯

『和剤局方』

大防風湯 祛風順氣活血脈壯筋骨除寒濕逐冷氣又治患痢後脚痛痲弱不能行履名曰痢風或兩膝腫大痛髀脛枯腊但存皮骨拘攣跼臥不能屈伸名曰鶴膝風服之氣血流畅肌肉漸生自然行履如故

右爲麤末每服伍錢水壹盞半入薑錢柒片木棗壹枚同煎捌分去滓温服壹心食前

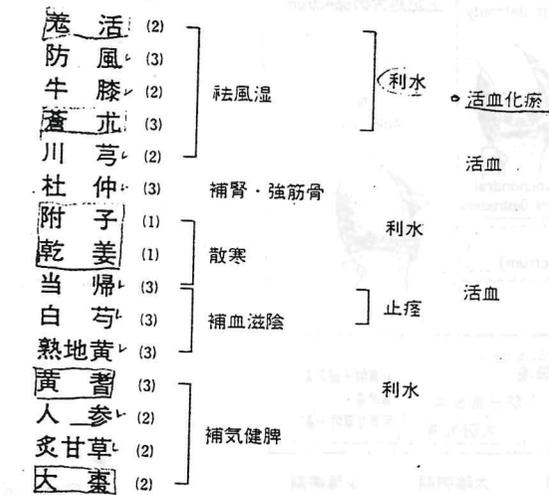
羌活(2) 獨活(3) 防風(3) 牛膝(2) 秦艽(2) 防風(2) 細辛(2) 牛膝(2) 川芎(2) 杜仲(3) 桑寄生(2) 附子(1) 杜仲(2) 桂枝(2) 乾姜(1) 肉桂(2) 當歸(3) 白芍(2) 白芍(2) 熟地黄(3) 黃耆(3) 熟地黄(2) 人參(2) 炙甘草(2) 大棗(2)

白芍藥 去蘆酒浸 白朮 各貳兩
 牛膝 去蘆酒浸 人參 去蘆
 附子 炮切微炒 川芎 各壹兩半
 杜仲 去蘆酒浸 杜仲 去蘆
 黃耆 去蘆酒浸 黃耆 去蘆
 羌活 去蘆酒浸 羌活 去蘆
 甘草 炙各壹兩

〔1〕 衆方規矩／曲直瀨道三(1507~1594年)

- 1) 大防風湯は、風を去り、氣を順し、血を増し、筋を強くし、また痢病のあとに脚が弱り、痛んで歩けなくなるもの(痢風と名づける)を治す。また両脚が腫れ痛み、脛が細くやせるものを鶴膝風というが、その他一切の麻痺でなえ細り、風と湿とに傷られ、虚を兼ねた症は、本方を用いれば効がある。
- 2) 思うにこの方は、痿躄を治す聖薬である。またこの方は、不足の症でなえたものを治すもので、有余の風痺には用いてはならない。大秦朮湯に石膏があり、この方に附子がある点に留意して、使い分けが必要がある。
- 3) 本方は、腰が立たず、身がしびれ痛むもの、あるいは痢のあとの鶴膝風に用いて妙効がある。

大防風湯



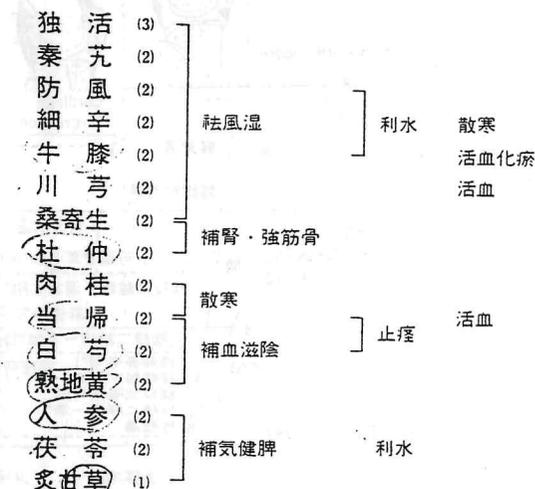
〔3〕 当壯庵家方口解／北尾春甫(1600年代)

- 1) 大防風湯は痛風、脚氣など、虚冷、寒湿に因って痛むものに用い、また加味大補湯を用いることもある。
- 2) 本方は、痢秒後の鶴膝風、虚冷に用いる。虚冷のものは、脈進であっても按じてみると弱である。
- 3) 産後に、口眼喎斜、手足牽引、あるいは筋惕肉瞤、あるいは驚悸戰掉してやまず、あるいは寒熱を發し、脈はあるいは大で力なく、あるいは虚細のもの、これらはみな氣血ともに虚して、筋脈を榮養することができないのである。調血飲の加減方はあるが、この症には手ぬるく、十全大補湯に附子を加えたものがよく、また血虚の中風であれば大防風湯、加味大補湯を用いるとよい。またこの症で癲癇を發することがあるので、常々持病として絶え入ること(原文のまま)があるかどうかを確かめる必要がある。また産後に誤って風(邪)に感じてこのようになることもあり、これも大防風湯、加味大補湯で温散するとよく、痰があれば竹瀝、姜汁を加える。
- 4) 産後に瘀血を去ること過多で、全身の骨筋の痛みで転側できないものがあるが、これは血虚して筋骨を榮養することができないためである。冷痛するものには、五積散、交加散、加味大補湯、大防風湯、また居所が湿地ならば加減滲濕湯の加減方と、冷熱を分けて治を施すべきである。

〔12〕 勿誤藥室方函口訣／浅田宗伯(1815~1894年)

- 1) 大防風湯は、鶴膝風で兩膝が腫大して痛み、脛が枯腊するものを治す。『和剤局方』に「麻痺痿軟、風湿虚を狭む者」とある。
- 2) 大防風湯は、『百一選方』では鶴膝風の主剤とし、『和剤局方』では麻痺痿軟の套剤としているが、その目標は、「脛枯腊」とか「風湿挟虚」などの氣血衰弱の候がなければ効がない。もし実するものに与えたとかえて害がある。

独活寄生湯



〔7〕 方彙口訣／浅井貞庵(1770~1829年)

大防風湯は、八物湯から茯苓を去り、黄耆、附子、杜仲、牛膝、羌活、防風を加えた13味の方で、世間通用の方である。痛風、痿躄にも用い、風湿によって氣血のめぐりが悪く、筋も弱り、骨も力なく、麻痺、痿軟となって腰の力がぬけ、足首が痿え、下焦が弱いというものによい。風湿があるうえ、氣血ともに虚したもので、氣血の虚に風湿が乗じたのである。この方はよく用いる処方、中風に限らず、総体に風、寒、湿で足の通いが悪く、歩行できないものに用い、温補の薬である。

〔8〕 校正方輿輒／有持桂里(1758~1835年)

- 1) 大防風湯は、久しく脚氣を病んで足脛が枯れ細り、あるいは痛み、あるいは痒く、あるいは軟弱となってひきずるもの、および痢後風、鶴膝風、附骨疽など、一切の腿膝の腫毒が潰爛して膿水が絶えず、虚瀝するものに用いて効がある。
- 2) 脚氣が大半瘥えて、麻痺、痿軟がやまぬものは、桂枝芍薬知母湯、大防風湯の2方を選り、氣長にこれを服する。この症は、腎氣丸などを用いることもあるが、上記2湯のほうが勝っている。
- 3) 痛風後、痢病後、脚氣後、あるいは鶴膝風で痿躄となるもので、大防風湯を用いて応じないものはなく、「一切の麻痺、痿軟を治す」というのは虚言ではない。

〔9〕 梧竹樓方函口訣／百々漢陰(1773~1839年)

大防風湯は、鶴膝風の主方である。しかしその初起で熱の盛んな時には適当でなく、麻黄左経湯を用いて發表する。大防風湯は、熱が去って腫痛のみとなり、脚がやせ細って歩けなくなり、年月を経たものによく、氣血の両虚を補う手段を兼ねる。その他一切、脚膝が痛み、あるいは拘攣し、特に夜分に酸疼し、脚が日々にやせ細り、冷氣にあえば痛みが甚だしくなるなど、すべて容体が氣血兩虚とみたならば本方を用いてよい。

大風湯が奏効した全身性アミロイドーシスを伴った慢性関節リウマチの1例

後藤 博三¹⁾ 新谷 卓弘¹⁾
三瀧 忠道²⁾ 寺澤 捷年¹⁾

十全大補湯が奏効した慢性関節リウマチの一例

A Case of Rheumatoid Arthritis Effectively Treated with Juzen-taiho-to

高橋 宏三 寺澤 捷年 島田多佳志
三瀧 忠道¹⁾ 今田屋 章²⁾

Kozo TAKAHASHI Katsutoshi TERASAWA Takashi SHIMADA
Tadamichi MITSUMA¹⁾ Akira IMADAYA²⁾

要旨 十全大補湯が奏効した慢性関節リウマチ (RA) の1例を報告した。症例は74歳の女性、20年来のRAで、諸治療に抵抗して進行し StageIV, ClassIV, ムチランス型を呈していた。活動性の高度な状態が続き、貧血も顕著にみられた。桂枝芍薬知母湯などで加療したが十分な効果が得られず、著しい気虚および血虚の症候を手がかりに十全大補湯に転方したところ、徐々にRAの活動性が低下し、これに伴って貧血が改善した。また食欲が増進し、リハビリテーションも積極的に行うことが可能となり、日常生活の自立が達成された。RAの漢方治療には麻黄剤や附子剤が広く用いられ、十全大補湯は補助的な兼用方として用いられることが多く、本方が主方となった治験例は中国の古典にあるのみで、近年の報告はない。本例は証に随って漢方方剤を用いることの重要性と、十全大補湯の抗リウマチ作用を示唆したものと考え

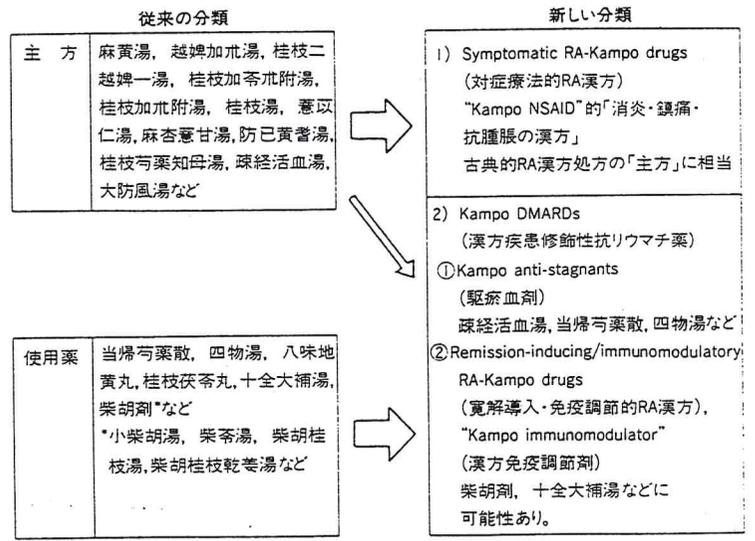


図4 現代 RA 漢方処方の新しい位置づけ分類 (Hiroya Tanaka, 1989)

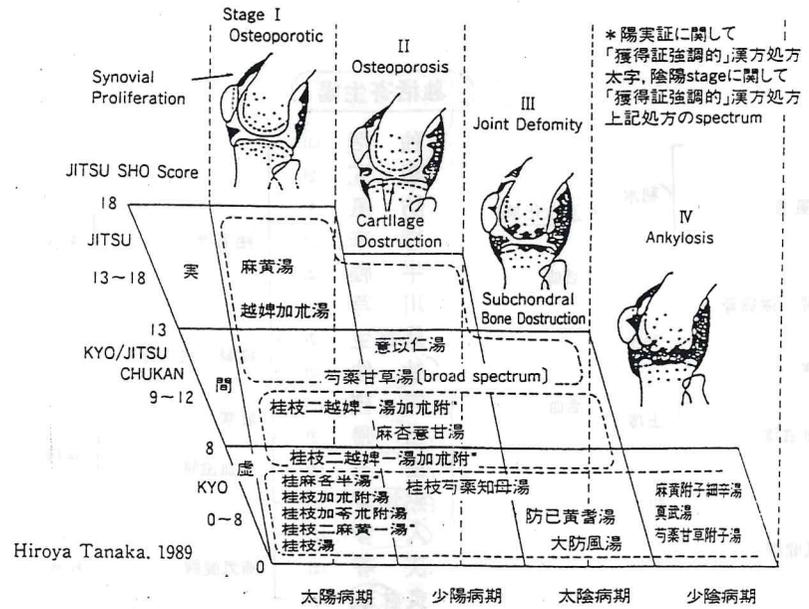


図5 対症療法的 RA 漢方処方のまとめ

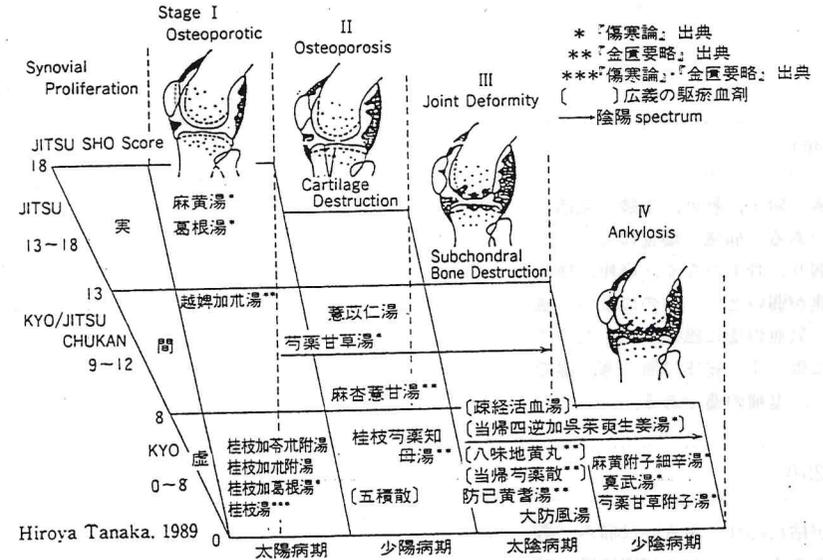


図3 古典的 RA 漢方処方運用の Shorealization - 漢方エキス剤の古典的応用 -

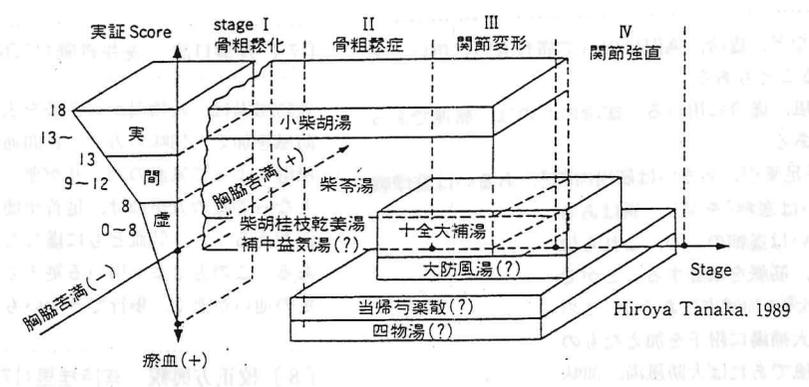


図9 RA-Kampo immunomodulator chart

① 慢性関節リウマチに大防風湯を用いた三例

ここに掲げる患者は、いずれも壮年の婦人で、外来患者として通院できる程度のもので、発病後二、三年経過しているものである。

古人の口訳では、氣血兩虚の重症の患者に用いることになっているので、便所にも、一人で歩いて行けないもの、床につききりの患者などに用いたが、期待したほどの効がなかった。

『切要方義』には、「大防風湯は兩足、痿弱し、或は沈重麻痺して行動すること能わず。兩膝虚腫す。名づけて鶴膝風と曰ふ等の証之を主る。拙按するに、是の方は風を去って氣を順にし、血を活かし、筋を壮にす。又痢ののち、脚弱く、緩痛して行履する能わざるを名けて痢風と曰ふ。或は兩脚腫病し、足脛枯枯す、名けて鶴膝風と曰ふ一切麻痺、痿軟、風濕、虚を挾むの候を治して、其効神の如し」とある。

また『勿誤藥室方函口訳』には、「此方百一選方には鶴膝風の主劑となし、局方には麻痺痿軟の套劑とすれども、その目的は、脛枯枯とか、風濕挾虚とか言い、氣血衰弱の候がなければ効なし。もし実する者に与ふれば却って害あり」という。

私の経験では、これらの口訳にある足脛枯枯とか、虚を挾むという症候に、引きずり回されないでいいように思う。枯枯は、光沢を失ってがさがさしていることであるから、下腿の部分の皮膚が、栄養が悪くてがさがさしていることで、これはこの処方を用いる重大な目標にはならないと私は考える。

第一例

患者は昭和二十年生れの主婦で、昭和五十二年四月十日の初診。

昭和五十一年十月二十日、朝起きると、手が腫れて痛み、足も痛くなり、某大学病院でリウマチと診断され、三ヶ月通院して治療したがよくなるらない。

左右肩関節、足関節、手関節、腰、大腿、指の関節などが痛む。朝痰がからむ。食欲はある。大便は正常、月経順調。体重五十五kg、身長一五五cm。

越婢加朮湯を用いる。八月までこの処方を用いる。疼痛に消長があり、左右の肩関節の痛みがひどく、胸がときどき刺すように痛む。

九月四日、大防風湯に転方。その頃、大防風湯の目標は、患部の炎症が軽微で、婦人患者であることの二つがいちばん大事だと気がついたので、この患者の痛む場所に手のひらを当ててみたところ、ほとんど熱感がなく、この部の発赤も軽微であったので、この処方を一ヶ月分与えた。

十月二日来院。右の肩が痛むだけで、その他の痛みは全く消失していた。

② 関節リウマチに大防風湯

大防風湯について、私は『漢方診療医典』の中で、次のように書いた。

「この方は慢性関節リウマチで、氣血兩虚というような衰弱したものを目標にして用いることになっているが、近年になって、この方は慢性のリウマチでも、比較的体力が衰えず食欲もあり、それでいて関節の腫脹と疼痛が長く残って全治しないものに用いて効のあることを知った。」

患者は昭和五年生れの婦人で、十九歳からリウマチにかかり、二十二歳の時、二カ年漢方薬を飲んだことがあつた。二十五歳で結婚。三十二歳より疲れると、咳が出るようになり、下肢の関節、肩、手関節などに腫脹が残っていて痛む。脈沈滞結、便秘、肘関節のリンパ腺腫脹、月経不順。

大防風湯を与える。咳のひどい時は、滋陰至宝湯を与える。続服三カ年あまり、この頃はほとんど全治。これにヒントを得て、最近また慢性関節リウマチで漢方治療三カ年になるが、少しもよくないという婦人に、この方を用い、半カ年程で、今までになく好調である。

③ 慢性多発性関節リウマチと大防風湯

近年、慢性多発性関節リウマチの患者が多くなった。その大部分が副腎皮質ホルモンの治療を受けた患者で、難治である。これらの患者のおかげでいろいろ勉強になった。

この病氣は女に多く、男には少ないが、女には大防風湯の効くものが多く、男には大防風湯があまり効かないことにこの頃気がついた。

そこで古人の口訳を振り返って読んでみた。浅田宗伯の『勿誤藥室方函』には「大防風湯(百一)鶴膝風、兩膝腫大して痛み、脛の枯枯せるを治す。局方に言ふ、一切の麻痺、痿軟、風濕虚を挾む者を治す」といい、同『口訳』には「氣血衰弱の候がなければ効なし。もし実する者に与ふれば却って害あり」とある。私はかつてこの『口訳』によって、氣力、体力ともに衰弱して、外来患者として来院できない者ばかり四、五人に用いて効がなく、その後十数年使用しなかった。

その後偶然のことで外来を訪れた姉妹の患者に、この大防風湯を用いて、半カ年余りの服用で全治し、実する者に与うればかえって害ありという宗伯の『口訳』に疑問を持った。

次の例は昭和五十一年二月十四日に、連れだつて来院した二人の婦人患者に、大防風湯加大黄を用いて、全治とまではいかないが八分通りよくなった話である。

(一) 患者は大正四年生れの婦人で、昭和三十八年に胃潰瘍の手術を受けてから関節リウマチにかかり、医薬は副作用が多くて、効のないのにあきれて、七年ほど前から鍼灸師の治療を受け服薬はしていないという。冒されている関節は、肩関節(左右)、肘関節(左方)、手関節(左右)、膝関節(左右)であるが、右(ひどい)、足関節(左右)。

食欲は普通、大便一日一行であるが硬い。血圧一一六―七四、血色普通。

疼痛を訴える関節を触診してみると、右足関節に軽微の熱感があるだけである。右膝関節は腫脹をみとめるが、熱感はない。

大防風湯加大黄〇・六を投与。その後一ヶ月分ずつ十三回同方を与え、全快したようであるから診てもらいたいと本年五月十五日来院。起挙動作に何の故障もなく血色もよくなっていた。

(二) 大正十一年生れの婦人。五年前より関節リウマチ。全身の関節が痛むと患者はいう。この頃腰痛もあり、コルセットをつけている。肩こり、胸やけ、ときどきすっぱい水が口の上ってくる。医師の薬のためのようだと患者はいう。血圧一四八―一〇〇、大便は硬く三日に一行。肥満して血色もよい。毎日インダシンを三回使用して疼痛をこらえている。関節のうちで、左右の膝関節と足関節が特に苦しいという。

大防風湯加防己大黄を与える。

この患者も(一)の患者と同様、今年の五月十五日まで一ヶ月分ずつ前方を続けて、全治した。インダシンは今年になって用いない。

大防風湯は、『大平恵氏和劑局方』に、患部が「赤熱焮腫者禁用」とあるように、患部が赤く腫れて熱感のあるものには禁忌である。炎症が激しい時にはよくない。

参考に、北尾春圃の『提耳談』の痛風(今の痛風ではなく関節リウマチである)の条に、「手足痛み、脈弱の者は加味大補湯(万病回春)、大防風湯可なり」といい、また「痛風、濕虚冷によるものは加味大補湯、大防風湯」とあるのを引用しておく。

要するに、虚証でなくてもよいが、炎症の激しいものには用いない方がよい。

④ 膝関節の疼痛に大防風湯

大正十二年生れの婦人。昭和五十二年五月七日の初診。

二十五年前膀胱炎にかかったことがある。十年ほど前から、冬になるとからだのあちこちが痒くなるが、夏汗をかきやすくなる、いつもなまじりやすくなる。

一カ月前ほど前に、急に胸が締めつけられるように苦しくなり、手がひきつれたが、それは一日だけですんだ気がつくと、下肢に浮腫ができた。

この頃、食欲がなく、だるくふらつく。口が苦く、口渇があり、左の肩がこる。のどの痛むこともある。大便一日一行、月経は閉止。

脈沈、舌乾燥。血圧一一〇―一七四。左右の膝関節に軽度の腫脹があり、座れない。起床時に手腕関節も軽く痛む。尿中蛋白(一)。

柴胡加竜骨牡蠣湯加防己を用いる。

二週間分を飲んで来院。浮腫消失。ふらつきなく、食欲が出た。口渇もなくなったが、夜間床に入ってからあちこち痛む。更に前方を用いる。

また食欲なくなり、膝が痛み、起居が苦しいという。大防風湯とする。

大防風湯は、『大平恵民和劑局方』に「足の三陰経のき損し、外邪虚に乗じて内に入り、腿膝疼痛を致し、或は鶴膝風、附骨阻と成るを治す」とある。

この患者は、この方一カ月分を服用して来院した時、膝の疼痛を忘れ、朝起床時に、痛みを覚えた手、腕や関節の痛みもすっかりよくなった。

私の経験では、慢性関節リウマチに用いてみると、婦人には奏効する例が多く、男子には奏効した例が少ない。

大防風湯証の患者の選定に、私は患者の手のひらをじつとなでてみる。もし患者が発赤して熱感があるなら、これを用いない方がよい。患部が腫れていても、熱感、発赤のないものによく効くようである。

⑤ 大防風湯で著効を得た例

私はかつて、大防風湯は婦人の慢性関節リウマチには効くが、男子には効かないと発表したが、今回この発表を取消し、男子にも効があった一例を報告しておく。

患者は明治三十三年生れの男子。四十年前、バラオで喘息にかかったことがある。昨年七月から手指の関節から痛み始め、現在は左右の膝関節が腫脹して痛み、歩行が困難である。瘦せて四十二kg。便秘するので麻子仁丸を飲んで通じをつけているという。

安定剤を飲んで眠っている。アロエを飲んで寒がりがよくなった。玄米食をやっている。血圧一三八―一七〇。痛む関節に、熱感も発赤もない。食欲はある。夜三回尿に起きる。昭和五十三年十一月二日、大防風湯を三十日分投与。

十日目に、まだ薬は残っているが、余り速くよくなったので、診てくれと行って足どりも軽く診察室に入ってきた。指の関節も、膝も痛みも全くなし。腫脹は残っている。安定剤を止めてみたら眠れないというので、この日温胆湯エキスに酸棗仁湯エキスを合方にして兼用した。薬はあるが、年末は忙しいので二カ月欲しいといって六十日分投与。十一月二十五日、手紙が来る。それには次のように書いてある。

「前略 この度は、西洋医学にては不治といわれる私の病氣、先生の類無き卓絶した御診療によりまして診察着手以来驚く程の快調な治療効果を挙げられ完治を見るに至りました。誠に有りがとう御座いました。我国に、東洋医学の名医ありとはかねて承っておりましたが、遠隔の地、治療をお願いすること不叶、苦しみましたが、私は幸運に恵まれて名醫の健腕に任せられ、今日の幸運をうける事が出来ました。重ねて御礼申し上げます。なお私と一緒に診療をお願い致します。なお私の痛みは全然ありませんが、調剤頂きましたお薬が約二カ月程御座いますが引き続き服用完全な体となし余生を送りたいと存じます。」

「かぜ」に消風散や大防風湯を使うことがある。

消風散の例は32歳の女性で、かぜで何度も鼻汁をかんでいるうち「鼻の中がカサカサ・ジクジクしてヒリヒリ痛む」と言う。来院した時は鼻腔粘膜が真っ赤になり鼻汁がこびり付いていた。既にかぜをひいてから1週間経っていて、知人の医師より葛根湯・小青竜湯・辛夷清肺湯が出されている。鼻腔粘膜の様子から湿疹に使う消風散を用いて著効を得た。

大防風湯の例は72歳の女性で、坐骨神経痛で八味地黄丸にて経過をみていた患者だが、かぜをひき軽度の悪寒、37~38度の熱、頭痛、関節の痛み、軽度の悪寒を訴えた。元来、乾燥傾向のある皮膚なので発汗剤はよくないと思い、試みにリウマチに使う大防風湯を処方した。この処方「大いに風邪を去る」の方意であるから使えないことはなかろうと考えた。暖かく休んだことがよかったのかもしれないが一日で解熱軽快した。